

国民国家のつくり方（巻頭エッセイ）

著者	増原 善之
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	200
ページ	1-1
発行年	2012-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003967

国民国家のつくり方 —「ラオの歴史」から「国民の歴史」へ

多民族からなるラオス国民は、数千年もの間、この愛する大地に住み、発展してきた。一四世紀半ば、すなわち、ファーングム王の時代以降、我々の祖先は統一されたランサン王国を建て、同国に繁栄をもたらした。

この一節、何からの引用か、お分かりになるでしょうか。ラオスの歴史教科書？ いいえ、正解はラオス憲法（一九九一年制定、二〇〇三年改正）の「前文」第一パラグラフです。諸外国の憲法を数多く読んでみた訳ではありませんから、確かなことは言えませんが、憲法の前文において、歴史上の人物の名前まで上げて自国の歴史を謳い上げというのは、あまり例がないと思います。それはともかく、この「前文」で注目すべきことは、「多民族からなるラオス国民」の祖先たちが、ランサン王国の建国に関わったと述べている点です。

史実に即して言えば、ランサン王国の建国において中心的役割を果たしたのは、現在のラオスで多数派を占めているラオ人の祖先たちであり、その他の民族が王国の成立に主体的に関わったとは言いにくい面があります。つまり、本来「ラオの歴史」にすぎなかった物語が、いつのまにか「多民族からなるラオス」国民の歴史」に書き換えられ、国家の根本法たる憲法の前文に掲げられることになったというわけです。

国民国家建設を進める党・政府にとって、ラオスの国土に暮らすすべての人々を「国民」と

してまとめあげていくことは、何にもまして重要なことだと考えられます。多種多様な民族的・文化的背景をもつ人々に「国民」としての一体性を意識させるために、教育やメディアを通して国語（ラオス語）およびあるべき国民像を定着させたり、国際的スポーツ大会などの機会をとらえて国家意識の発揚を促したりするなど、さまざまな取り組みがなされていますが、党・政府が「国民の歴史」を定め、国民の間で歴史の共有を図ることも重要な施策のひとつと言えるでしょう。そして、二〇〇〇年にはラオス人民民主共和国成立二五周年を記念して、情報文化省から『ラオス史』が刊行され、党・政府の歴史認識に基づく「国民の歴史」が公式に示されたわけですが、国民統合を進めるうえで「歴史」の果たす役割を見過ごすことはできないと思います。

しかし、党・政府は、それだけではまだ足りないと考えたのでしょうか。二〇〇三年には「前文」に登場したファーングム王の銅像が、二〇一〇年には「国民の歴史」においてシャム（タイ）に対する民族独立運動を率いた英雄として称えられるアヌ王の銅像がビエンチャン市内の公園に建立され、仏像を拝むが如く花と線香を手にした参拝者が今なお少なくありません。今後も歴史上の人物の銅像建立は続けられると言われており、「国民の歴史」を多くの人々の視覚に訴え、民族を越えて歴史の共有を図ろうとする党・政府の試みは、私たちが考える以上に確かな成果をあげていくことでしょう。

ますはら よしゆき／京都大学地域研究統合情報センター研究員

1963年生まれ。タイ国チェンマイ大学人文学部歴史学科修士課程修了。博士（地域研究）。専門はラオス前近代史。